シンポジウム報告

グランドテーマ：生とからだと体育を考える－実践からの体育哲学－¹

「病いと老いと死」から、生とからだと体育を考える

－幸せに死ねるための体育を求めて－²

パネリスト：

「病」から、からだと体育を考える	：久保正秋（東海大学） ³
「死」から、からだと体育の広がりに向かう	：木村競（茨城大学） ⁴
コメンテーター	：森知高（福島大学） ⁵
司会	：遠藤卓郎（筑波大学） ⁶

Illness, Ageing, Death, Life-Body, Physical Education, Practice

病い、老い、死、身体、体育、実践

（これまでの経過と本年度のテーマ）

このシリーズのシンポジウムは今年で3年目である。最後の年にあたる。これまでの各年度のシンポジウムは下記の通りであった。

'05年度：「体ほぐし」再考

ワークショップ形式（実技＋討論）

リーダー：村田芳子

コメンテーター：木村真知子

'06年度：「からだ気づき」の体育的意味

ワークショップ形式（実技＋討論）

リーダー：高橋和子

コメンテーター：舩本直文

このグランドテーマで始めるとき3年目の

テーマは「幸せに死ねるための体育を求めて」としたいとお知らせした。その心は今年も変わっていない。1年目、2年目のテーマと並べて見ると一見した限りではかなりの飛躍があるように見えるが、後述のようにその根本のところでは繋がっている。本年度の形式も1年目、2年目と同じように実践からとも考えたが、それではテーマがテーマだけに少し無理があった。また、本年度はまとめの年でもあるのでパネルディスカッション方式で行なうことにさせていただいた。

これまで2年間のシンポジウムでは、「生」の立場、実践の立場から考えてきた。からだに息づいているものを実感をもって感じ取り、そ

¹ Considering Life-Body and Physical Education — Philosophy of Physical Education Based on the Practical Fields —

² Considering Life-Body and Physical Education from the Perspective of Illness-Ageing and Death
— In Search of Physical Education for <Happy Release> —

³ Masaaki KUBO, Tokai University, 1117 Kitakaname, Hiratsuka, Kanagawa, 259-1292, Japan

⁴ Kiso KIMURA, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo, Mito, Ibaraki 310-8512, Japan

⁵ Tomotaka MORI, Fukushima University, 1 Kanayagawa, Fukushima, 960-1296, Japan

⁶ Takuro ENDO, The University of Tsukuba, 1-1-1, Tennodai, Tsukuba, Ibaraki, 305-8574, Japan

れを一人一人の内側から考えたいという思いからであった。一人一人の個人的存在にとって、「生」そのものにとって、体育がどういう意味を持ち得るのかを問いかけようとしていたと言っても良いだろう。

生やからだに対して体育はどのような意味があるのか、どのような貢献をすることができるのかといったことを「生」の立場から考えようとしたと言っても良いだろう。それは従来の体育目標（体力の養成や技能の発達、社会的性格の育成など）で言われてきたような意味に留まらないところのものを求めていることでもあった。或いは、それらから少し離れてでも、もう少し深いところの意味を探ろうとしてのことであった。

体育が「生」をいかに豊かにするのか、生の意味にどう関わっていくのかということ自身を自身の体験を通して考えてみようとしていた。その意味での「体ほぐし再考」であったし、「からだ気づきの体育の意味」であった。

本年度もその根本的なモチーフは変わっていないが、その方向性は180度違っている。そのベクトルの始点が大きく変わっている。「健康と体力」から「病い」に、「成長や発達」から「老い」に、「生」から「死」に変わっている。そのベクトルの終点がどうなったかについては以下の報告からご推察いただきたいが、その視点から体育の意味を再び問いかけようとしていることはご理解いただけたと思う。

（本年度の趣旨）

誰でもが知っているように「生」はいずれ終わる。死は誰が何と言おうと避けられない。同様に、病いも老いも生きている限り避けることはできない。その避けられない問題を考える立場から、もう一度「生とからだと体育」に照準を合わせてみた。このことが私たちに新たなパースペクティブをもたらしてくれるように思えたからである。案の段階では「少しばかり刺

激的に過ぎる」とお叱りの声もいただいた。しかし、この避けられない問題から目をそらしてばかりいて良いものだろうか。その中でも特に体育哲学という領域は、我々が未自覚の儘に知らず知らず目をそらし続けてしまっていることを自覚化せしめ、掘り起こして地表に引き出す責務が有るように思えてならない。まずはじっと目を凝らして見つめ続けてゆくことが必要なのではないだろうか。少しばかり冒険かも知れないが、正面から考えてみる価値は十分にあるように思えてならない。

「病のとき、体育は私にどんな意味があるのでしょうか？」

「年老いたとき、体育は私にどんな意味をもたらしてくれるのでしょうか？」

「避けられない死に直面したとき、体育にはどんな意味があるのでしょうか？」

と問われたとき、我々はどう答えたら良いのだろうか？数学の問題に答えるようには、答えられないだろう。客観的・実証的な答えは望むべくもない。しかし、このように問われたら体育人として何らかの応えるものを持たないではいけないようにも思える。確たる答えを持っていないまでも、一人の体育人として、それらの問題に対する一定の見識だけは持っていたいと思う。これらの問いと答えの在る次元は、もともとそのような性格を持っているのではないだろうか。

少し消極的な物言いを続けてしまったが、今回の問題提起はそうした消極的な意味だけでそうしたのではない。これらの問いの動機の根底には、幸せに死ぬるために体育はどうあれば良いのか、という願いとも希望ともつかないようなものが有るように思える。それは生を豊かにするために体育はどうあったらよいのか、というモチーフと鏡の裏表のような関係である。同じ山でも反対側の登山道から登れば、まったく違う風景に出会えるように、この問題をまったく反対の方向からアプローチすることによって

思いもよらない眺望と認識を得られるのではないだろうか。

これまで生を豊かにするための体育という話は山のように語られてきた。しかし、幸せに死ぬために体育はどうあればよいのか、そのために体はどうあればよいのか、またそれはどう開発されてゆけばよいのか、ということなどについては余り語られてこなかったように思える。しかし、多くは語られて来っていないが、前例が全くないわけでもない。例えば、死についてだけ例を挙げてみると、禅には座脱立亡、ヒンズー教にはマハーサマディと言われる技術があるようだ。これらはある種の技法を用いて意図的に死ぬ技術のようである。いかなる理由でこのような技法が開発されたのかについてはわからないが、良く生きるための技術ばかりでなく、死ぬための技術というものが考えられ、開発され、伝えられているということは注目しておいて良いだろう。

よく知られているその種の技法として仏教の即身成仏を挙げることができるだろう。少しニュアンスは異なるけれども、身近なところでは肥田式強健術の肥田春充の例がある。彼は年老いた時、自らの意志で健康なままに食を断ち、家族に見守られながら静かにその生を閉じて逝った。そのことを古武術の甲野善紀が「表の体育・裏の体育」の中でかなりの分量をさいて紹介している。裏の体育としてである。ここで注目したいのは、そのことを彼が体育として（裏の体育としてだが）捉えているということである。死ぬこと、それも自覚的に死ぬことを、体育の範疇に入れているわけである。少しばかり言い過ぎかも知れないが、幸せに自分の生を閉じる方法として、それを体育の範疇に入れているのである。

体育が「病い、老い、死」をどう捉えていくかということは、体育哲学にとって本質的な問題の一つであると言って良いのではないだろう

か。この問題にどのようなアプローチが適切なのかについては色々と議論のあるところだと思うが、思い切った一歩（飛躍かも知れないが）を踏み出しても良いときだと思う。

このような難題に応えてくださったパネリストとコメンテーターを以下に紹介したい。

久保先生は、東海大学体育学部教授で体育哲学がご専門である。本学会や体育学会などでも活発に活動されている。堅実な思索と実践的基盤に基づいた哲学的探求には従来から定評がありである。先生は、体育を哲学的に探究するご自身の在り方を次のように比喩的に述べておられる。「息の続く限り潜り、そこから海面を見上げてみよう。そうすれば海面をひたすら泳ぎ回っていた頃には見えなかった風景を見ることができる。」先生ご自身の体験から健康や病いについても思索を深められているとお聞きしている。今回はさらに老いの問題も絡めて、体育の在り方について論じていただいた。その内容については後載の先生ご自身による論考をお読みいただきたい。

木村先生は本学会には初めてお越しいただいた。茨城大学教育学部教授で哲学がご専門である。東京大学文学部哲学科を卒業され、同人文科学研究科を修了されている。茨城大学ではユニークな授業を展開されていた。「死で考える」という名の授業である。その時の講義ノートをもとに「演習・死の哲学」という本を上梓されている。その本の中で我々の死というものが如何に社会的なコンテクストの中に位置づけられているかを見事に解き明かされている。また身体やスポーツにも強い関心を持たれており、授業においても身体に関する演習を開講されている。「死」を考える立場から、体育についてご提言をお願いした。その内容については同様に後載の先生ご自身による論考をお読みいただきたい。

コメンテーターとして、福島大学の森先生を

お願いした。本学会の最古参の一人である。現在は体育科教育学がご専門である。福島大学附属小学校校長を務められるなど、実践的な経験も豊富にお持ちである。体育やスポーツについての堅実な思考と現場をしっかりと見据えた着実な発言には定評がありである。体育の立場から、パネリストの先生方に様々な質問を投げかけ、異論を提出していただくようお願いした。

パネリストとコメンテーターの先生方には、本年度のシンポジウムに多くの問題性や様々な限界が有ることをご納得いただいた上でお願いをした。お願いするに当たって、更に無理なお願いを重ねている。ほとんど世話人の我が儘と言って良いのかもしれないが、以下の2点である。

○先行研究の紹介、批判的検討はなるべく無しでお願いしたい。

○なるべく実体験に即して、或いは具体的な事例を元に、考えを述べていただきたい。

お引き受けいただいた3人の先生方の難渋の程は察して余り有るものがあったが、敢えてそうお願いした。

(全体の経過)

当日は、以下のような流れで行われた。

- 趣旨説明 : 10分
- パネリストの発表 25分×2人 : 50分
- 質問紙への回答と追加Q&A : 15分
- フリーディスカッション : 30分
- パネリスト最終コメント 3分×2 : 7分
- コメンテーターの最終コメント : 5分
- 司会・世話人のまとめ : 2分

(主な質疑応答とディスカッション)

以下に挙げたものは主なものだけであるが、様々な質問が提出され、更に踏み込んだ応答がなされた。質疑応答、ディスカッションの具体的な内容までは紙面の都合上割愛せざるを得な

いが、それぞれにリアルで熱のこもった意見の応酬・交換であった。

○発達の論理を越えるためには？

*越えると言うより別の論理との調和が必要だろう。

○健康な人が自ら死を選ぶことが良いことなのか？

*若い人には死んで欲しくない。

○We-Bodyと性との関係はどうか？

*体の潜在的同調性、相互性と深く関わってくる。

○死の文化というものが有りうるか？

*死は文化と言って良い、動物にとって死はない。

○老人にとって、生きるということはどういうことなのか？

*家族にとっての生の相互性を考える必要性があろう。

○配慮は、老いにも、死にも、生じるか？

*病、老い、死にも、さらには死後への配慮もなされている。

○個人的な死も大切だが、社会の死も問題ではないか？

*社会的な死というのは比喩的な用法だろう。

(司会・世話人のまとめ)

最後に本年度のシンポジウムのまとめを司会者の身勝手な感想という形で報告したいと思う。と言うのも問題の広がりや深さと多様さのために「まとめる」ということが不可能に思えるからである。世話人として特に印象深く感じ取れたことを紹介してまとめに代えさせていきたい。

本シンポジウムではテーマの性質上もともと何がしかの論理的な結論を導き出すことなどは意図されていなかった。このシンポジウムがこうした問題領域を切り開いてゆく切っ掛けになることだけが期待されていた。その点では極め

て有意義な成果を上げることができたと思う。実際の議論では、かなり生々しい実感のある問題提起が出されたり、様々な立場からの意見も出され、議論は熱を帯び、いつの間にか予定時間を30分以上もオーバーするほどであった。

内容的には、パネリストの久保先生からは身体教育を発達期だけに限るのではなく、人生全体を通してライフサイクルという観点から考える必要があること、そしてそのためには発達の論理からだけで考えるのには限界があること等を提示していただいた。またそのためには身体の捉え方に We-Body という観点を加えることが有効ではないかという提案をなされたが、それは奇しくも木村先生のご発表の内容と氣を一にするものであった。

また哲学者の木村先生からは、観念としての死への対処法には限界があるが、からだの実在性、潜在的同調性といった観点到に注目することで、幸せに死ぬるための体育ということに、灯が見える可能性を示唆していただいた。その上で「ホスピスで体育をやるとしたら何をおやりになりますか？」というこれ以上ラジカルなものはないようにも思える根源的な問いかけをしていただいた。

コメンテーターの森先生からは、往年のテレビドラマ「逃亡者」の構図を比喩的に用いながら、体育には体力と技術と愛が必要だが、そればかりではなく、今回のようなテーマも体育の在り方を考察、模索してゆく上で大切であること、学校体育やスポーツ教育を考える上でも、こういう問題を通してバランスを取りながらトータルで考えてゆく必要があることなどを示唆していただいた。またこうした試みこそが実践からの体育哲学を意味あるものにしてゆくだろうと言っていた気がする。

会長の片岡先生からは優しい語り口ながら、強烈なコメントをいただいた。以下はその要約である。

＜私は72才になりましたが、まだ体育教師を

やっている。84才の生徒を教えている。実技の授業をやっているんです。体育の教師は80才、90才になっても体育の授業をやって欲しい。体育の教師が老いをどう生きるのか、そこにこそ答えの見つかる可能性があるのではないのでしょうか。＞

まさに実践からの体育哲学の真骨頂というべきであろう。大きな課題と希望をいただいた気がする。生きることの哲学、体育の哲学を体育人はその「生きざま」で示せと言われたような気がする。

ここにいたって、自分自身を振り返りながら、少し離れて考えてみたら、私の個人的な人生もホスピスとさほど変わらない気がしてきてしまった。死までの時間が不確定であるか、ある程度予測されているかの違いはあるけれども……。

そこでさて、私は私のホスピスで自分自身にどのような体育をやるのであろうか？

この問いを発したとき、記憶の深みから浮かび上がってきた言葉がある。前回のシンポジウムでの高橋先生の言葉である。

「今、ここで、何に気づいているのか？」

「いま、ここに、動くわたし（からだ）がいること、言い換えれば、かけがいのないわたしがいることを……」

「この実習は共に生きるを実感することでもある……この生きているからだで他者と触れ合い、共に生きていることを実感するというのは、とても深く大切な……」

もうこれ以上の言説は蛇足をも越えてしまいそうである。

最後に、この3年間のシンポジウムにご参加いただいたワークショップリーダー、パネリスト、コメンテーターの先生方、そして共に動き、汗を流し、深く考えて下さったすべての参加者の先生方に深く感謝申し上げます。

（文責：遠藤）